Students' Motives for Proceeding to University and Their Career Orientation: A Study in Faculty of Letters at KANAZAWA University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9829

人間社会環境研究　第15号　2008. 3

金沢大学文学部学生における大学進学動機と進路意識[1)]

人間社会環境研究科人間文化専攻　三　保　紀　裕
文学部　岡　田　　努
文学部　轟　　亮

Students' Motives for Proceeding to University and Their Career Orientation : A Study in Faculty of Letters at Kanazawa University

MIHO Norihiro
OKADA Tsutomu
TODOROKI Makoto

Abstract

The purpose of the present study was to examine the relationships between motives for proceeding to university, and career orientation, in Faculty of Letters at Kanazawa University. The following items were examined by 525 freshmen (175 students in the 2004 enrollment, 173 students in the 2005 enrollment, and 177 students in the 2006 enrollment) in Faculty of Letters at Kanazawa University: motives for proceeding to university; career orientation. Through the process of the HOMALS and the cluster analysis about motives for proceeding to university, three clusters were categorized: 1) students who regard campus life as being important; 2) students who regard individual goals as being important; and 3) students who regard level of entrance examination as being important. Students in group one and group three didn't show clearly career orientation. Students in group two showed more clearly career orientation than other groups. The results of the present study indicated that students in Faculty of Letters have some types of motives for proceeding to university.

Keyword: motives for proceeding to university, career orientation, transition from education to work

問題と目的

近年における大学への進学志向は広く若者たち全般に見られる傾向であり（児美川, 2006），1990年代以降，大学・短大への進学率は上昇してきた。平成18（2006）年度学校基本調査報告書（文部科学省，2006a）によれば，2006年３月高校卒業者のうち大学への進学率は49. 3%であり，前年度よりも２ポイント上昇しているほか，５年前の2001年３月高校卒業者の大学進学率（文部科学省，2001）からは4. 2ポイント，10年前の1996年３月高校卒業者の大学進学率（文部省，1996）からは10. 3ポイントもの上昇を示している。しかし，このように大学・短大への進学率は上昇する反面，1990年代以降の傾向として就職率の低下，無業者率の上昇が同時に指摘されており（日本労働研修機構，

2000)，これらの問題は，高校卒業時点における新規学卒者の正社員としての就職，すなわち正規就業の困難化と，正社員以外の形態として就職する，非正規就業の増加の問題として注目されている。

このような正規就業の困難化と非正規就業の増加の問題は，高校卒業時点での問題としてのみならず，大学卒業時点における問題としても注目されている。平成18 (2006) 年度版労働経済白書 (厚生労働省，2006) によれば，2006年４月１日時点における新規学卒者 (大学卒) の就職率は95.3%であり，新規学卒者の就職率は改善傾向にあることが示されている。しかし，労働経済白書において示されている「就職率」とは「就職希望者に占める就職者の割合」である。そのため，豊田・菊池 (2002) の指摘にもあるように，当初就職志望であった者が進学などへ進路変更した場合には，その者は就職希望者の分母から省かれるため，実態としては，大学卒業後に正規就業した者は全体の約６割程度にすぎず，残りの４割は正規就業以外の選択をしており，全体の約２割が大学卒業後，就職も進学もしていない状況が報告されている (文部科学省，2006b)。以上の点から，正規就業の困難化と非正規就業の増加の問題は高校卒業時点，大学卒業時点の双方における問題として注目されており，「学校から職業への移行」が困難化 (長期化・複雑化・不安定化) していることが指摘されている (児美川，2006)。

さて，このような「学校から職業への移行」が困難化している中，大学・短大への進学率は上述の通り上昇してきたが，高校の時点では進学という選択をし，大学へ進学してきた者は一体，どのような理由，目的で進学してきたのだろうか。何を目的として大学に進学するのか，あるいはしてきたのかという問題については，「大学進学動機」というテーマでの研究の蓄積があるが，近年における大学進学動機の特徴は，大学卒業後の進路意識とはどのような関わりを持つのだろうか。

柳井 (2001) は，本来，大学とは真理探究の場であるが，大学・短大への進学率の上昇に伴う高等教育の大衆化によって，大学進学動機が多様化しており，大学の本来的な機能が失われるようになったことを指摘している。大学進学者の場合，大半の者は大学卒業時点が「学校から職業への移行」の時期となることが考えられる。そのため，進学者の中には，大学卒業後の進路を意識した上で進学してきた者もいるだろう。例えば古市 (1993) は，地方国立大学に所属している大学１，２年生1,103名を対象に，大学進学動機についての調査研究を行っている。結果，大学進学動機については「無目的・同調」「享楽志向」「勉学志向」「資格・就職志向」の４因子を抽出しており，就職を意識した傾向が１つの因子として見られている。また，柳井・清水・前川・鈴木 (1989) は高校２年生90,906名を対象とした調査研究から，大学への進路意識は「目標志向性」「進路成熟」の２つの座標軸からなる座標空間によって説明でき，これらの強弱によって，「学問志向型」「資格取得型」「モラトリアム型」「就職志向型」の４類型が存在するとしている。そして，これらの類型においても，就職を意識した傾向が１つの類型として見られている。

このように，古市 (1993)，柳井ら (1989) いずれの研究においても，大学進学において就職を意識している傾向が見られ，「学校から職業への移行」を見すえた上での選択を行っている者の存在が見られる。

しかし，就職を意識した上での進学をしている者がいる反面，「学校から職業への移行」を先延ばしにして進学してきた者も少なくはないだろう。大学のモラトリアム的機能を求める傾向は，古市 (1993) の「無目的・同調」「享楽志向」や，柳井ら (1989) の「モラトリアム型」などにも見られるほか，淵上 (1984) の高校３年生506名を対象とした調査研究においても，進学志望動機の因子の１つとして「モラトリアム機能」「大学の副次的機能」といった因子が抽出されており，以前から大学のモラトリアム的機能を求める傾向が指摘されている。

以上の様に，大学進学動機には大学の本来的機能を求める側面以外に，就職志向的側面，モラト

リアム志向的側面の存在が考えられるが，このような特徴の違いによって，大学卒業後の進路意識には違いが生じることが考えられる。

また，大学進学動機の特徴は，学部によっても異なることが考えられる。例えば古市（1993）は，医歯薬系，教育系の学部に所属している学生よりも，文学系の学部に所属している学生の方が「資格・就職志向」が低いことを明らかにしているほか，柳井ら（1989）は，理科系分野進学希望者は学問研究への志向性が強く，文科系進学希望者は付随的目的志向が強いこと，そして就職志向性は経済・経営・商学系や工学系進学志望者に強く見られ，教養志向は文学・外国語系や教育・心理・社会学系進学志望者に強く見られることを明らかにしている。

学部による相違が見られているのは大学進学動機のみならず，進路意識においても見られている。古市（1995）は，地方国立大学１，２年生652名を対象とした調査研究から，文学部および理工農の各学部の学生の方が，医歯薬の各学部の学生よりも職業忌避的傾向が強いことを明らかにしており，文学部および理工農の各学部では，特定の職業との結びつきが弱く，明確な職業展望を持たない学生が多いことを示唆している。

以上の点から，大学進学動機の特徴は学部によって異なり，それに応じて大学卒業後の進路意識にも違いが生じることが考えられる。特に文学部については，大学進学動機においては資格・就職志向が低く（古市，1993），他の学部よりも職業忌避的傾向が強いとされている（古市，1995）。古市（1995）は，このような職業忌避的傾向そのものは進路未決定の問題につながるものであるとしており，また，安達（2004）は，職業選択に主体的に関わろうとしない受身な姿勢は，進路未決定への問題へとつながる可能性が大きいことを指摘している。そのため，「学校から職業への移行」が困難化している現在，大学進学動機の特徴と大学卒業後の進路意識の関わりについて検討することは，大学のキャリア教育において重要な意味を持つものであると考えられる。

そこで，本研究では金沢大学文学部で毎年実施されている入学者アンケート調査の過去３年間にわたる調査データから，以下の点について検討することを目的とする。

１．金沢大学文学部学生における，大学進学動機の特徴と傾向を明らかにすること。
２．大学進学動機の特徴と，大学卒業後の進路意識との関わりについて明らかにすること。
３．金沢大学文学部入学時点での大学卒業後の進路意識と，実際の進路実績の相違から，どの時点において就職についての主体的な選択がなされているのかについて考察すること。

以上３点を本研究の目的とする。

方　法

下記の方法による質問紙調査を行った。

調査協力者

2004年度，2005年度，2006年度入学の金沢大学文学部１年生525名（うち男性195名，女性329名，不明１名）。2004年度入学者175名（うち男性63名，女性111名，不明１名），2005年度入学者173名（うち男性64名，女性109名），2006年度入学者177名（うち男性68名，女性109名）。

調査内容

受験決定理由についての項目　金沢大学文学部を志望する（受験しようと決める）上でどのような点を重視したかについて問う項目。項目数が年度によって異なっており，2004年度，2005年度調査では11項目，2006年度調査では13項目から成る。いずれの項目についても，あてはまる項目にいくつでも印をつけるように教示した。

大学卒業後の進路志望　調査時点での大学卒業後の進路志望について問う項目。「大学院に進学」「民間企業に就職」「教員として就職」「公務員として就職」「家業を継ぐ」「その他」「考えているが未定」「まだまったく考えていない」の８項目から成り，あてはまるもの１つに印をつけるように教示した。

なお，調査票にはこれらの質問項目以外に，入

試や大学生活についての質問項目も含まれていたが，ここでの報告は省略する。

調査時期

2004年４月，2005年４月，2006年４月。いずれの調査も，各年度の文学部の学科別新入生オリエンテーションの際に，『文学部新入生の入学決定プロセスに関する調査』の一環として，各年度の文学部新入生全員に対して実施された。なお，文学部は人間学科，史学科，文学科の３学科で構成されている。

結　果

大学進学動機の特徴について

金沢大学文学部の受験決定理由の各項目に対する反応数を表１に示す。なお，受験決定理由についての項目は調査年度によって項目数が異なっているが，ここでは各年度に共通する11項目を分析の対象とした。

“このなかに重視したことはない”項目への回答数はわずか（３件，0.6%）であったため，分析の対象から除外した。それぞれの質問について，選択されたものを１点，選択されなかったものを２点とし，等質性分析（HOMALS）を行い，第Ⅲ軸まで求めた。解釈可能な軸として第Ⅱ，Ⅲ軸を解釈の対象とした。第Ⅱ軸は教育的機能（＋）～環境的機能（－），第Ⅲ軸は目的追求（＋）～学力（－）の軸と解釈された（図１）。

さらに第Ⅱ軸と第Ⅲ軸のオブジェクトスコアを変量とするクラスタ分析（Ward法）を行い，回答者の分類を行った結果，距離係数.15を指標として３クラスタが得られた。

第１クラスタはオブジェクトスコアの平均値が第Ⅱ軸においては負の値，第Ⅲ軸においては正の値を示しており，環境的機能と自分の目的を重視して受験を決めた群であると考えられた。また第Ⅱ，Ⅲ軸のカテゴリ数量化スコアと，第１クラスタのオブジェクトスコアの分布の比較から，本クラスタを“私生活志向群”と命名した。

第２クラスタはオブジェクトスコアの平均値が第Ⅱ軸，第Ⅲ軸ともに正の値を示しており，教育的機能と，自分の目的を重視して受験を決めた群であると考えられた。また第Ⅱ，Ⅲ軸のカテゴリ数量化スコアと，第２クラスタのオブジェクトスコアの分布の比較から，本クラスタを“目標志向群”と命名した。

第３クラスタはオブジェクトスコアの平均値が第Ⅱ軸，第Ⅲ軸ともに負の値を示しており，第Ⅱ軸の平均値が小さい点から，主に自分の学力に基づいて受験を決めた群であると考えられた。また第Ⅱ，Ⅲ軸のカテゴリ数量化スコアと，第３クラスタのオブジェクトスコアの分布の比較から，本

表１　調査項目の回答頻度

「金沢大学文学部の受験決定において重視した点」

項目	男性（%）	女性（%）	全体（%）
１．勉強したい学問分野のコースがあること	157（80.5）	277（84.2）	435（82.9）
２．希望する資格が得られること	27（13.9）	64（19.5）	91（17.4）
３．卒業後の進路実績	9（ 4.6）	18（ 5.5）	27（ 5.1）
４．課外活動（サークルなど）の状況	8（ 4.1）	25（ 7.6）	33（ 6.3）
５．キャンパスの環境	33（16.9）	89（27.1）	123（23.4）
６．国立大学であること	172（88.2）	288（87.5）	460（87.6）
７．入学試験の科目数	59（30.3）	110（33.5）	169（32.3）
８．（大学・学部の）受験ランキング上の位置	83（42.6）	116（35.3）	199（37.9）
９．在学の費用（学費・生活費）が安くすむこと	50（25.6）	86（26.1）	136（25.9）
10．金沢市の魅力	42（21.5）	91（27.7）	134（25.5）
11．このなかに重視したことはない	1（ 0.5）	2（ 0.6）	3（ 0.6）

註：（　）内のパーセンテージは，それぞれ男女別全回答者に対する比率

クラスタを“受験ランク重視群”と命名した。

各クラスタ間でのオブジェクトスコアの平均値（表２）について第Ⅱ，Ⅲ軸別個に一元配置分散分析を行ったところ，いずれも有意差が見られた（第Ⅱ軸：$F(2)=289.371$，$p<.001$，第Ⅲ軸：$F(2)=381.345$，$p<.001$）。Tukey法による多重比較の結果，第Ⅱ軸では第２＞第３＞第１クラスタの関係が見られ，第Ⅲ軸では第１，第２クラスタが第３クラスタよりも値が高かった。

各クラスタの人数構成は第１クラスタが195名（男性63名，女性131名，不明１名），第２クラスタが156名（男性56名，女性100名），第３クラスタが174名（男性76名，女性98名）であった（表３）。ANOVAコーディングによる対数線形分析（松田，

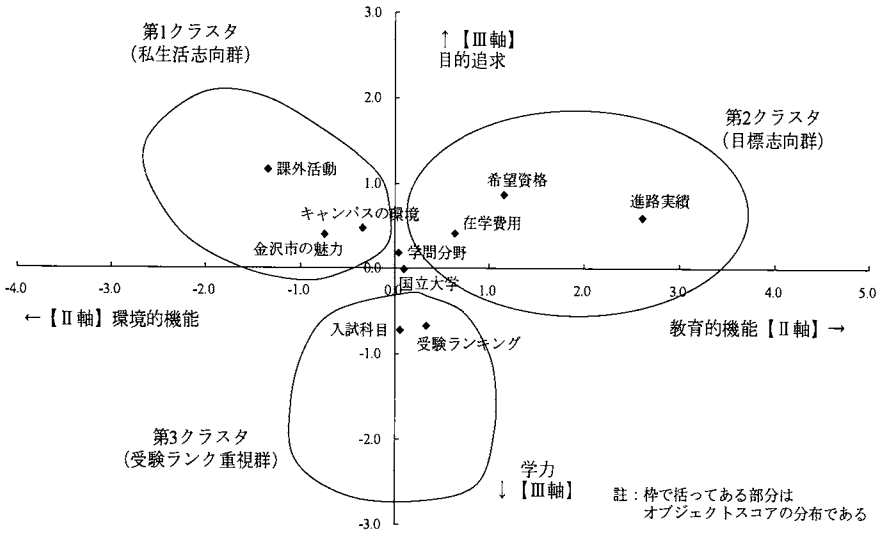


図１　受験決定理由　等質性分析　カテゴリ数量化スコアの散布図

表２　各クラスタのオブジェクトスコアの平均と標準偏差

クラスタ		1	2	3	分散分析
n		195	156	174	（上段：F，下段：多重比較）
Ⅱ軸	平均	−0.709	1.058	−0.152	$F=289.37$（$p<0.001$）
	標準偏差	0.613	0.895	0.550	2＞3＞1
Ⅲ軸	平均	0.487	0.610	−1.093	$F=381.35$（$p<0.001$）
	標準偏差	0.543	0.821	0.547	1＝2＞3

註：　クラスタ１：私生活志向群　クラスタ２：目標志向群　クラスタ３：受験ランク重視群

表３　各クラスタの人数構成と推定値（（　）内）

性別／クラスタ	1（私生活志向）	2（目標志向）	3（受験ランク）
男性	63(−0.105)	56(−0.029)	76(0.134*)
女性	131(0.105)	100(0.029)	98(−0.134*)
計	195(不明１)	156	174

註：推定値が有意に正の値を取るものは，相対的に大きな度数を持つことを示し，有意に負の値を取るものは度数が小さいとみなしうる
*$p<.05$

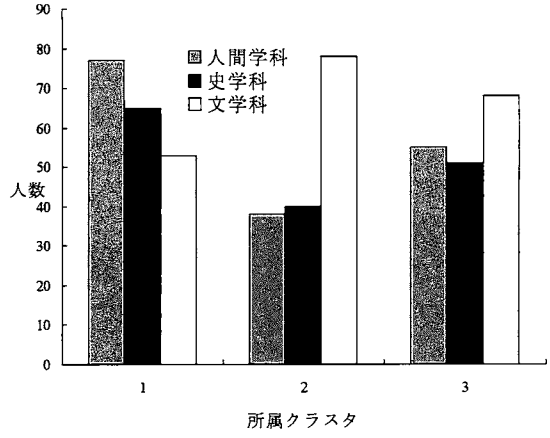


図２　所属クラスタの人数構成（学科別）

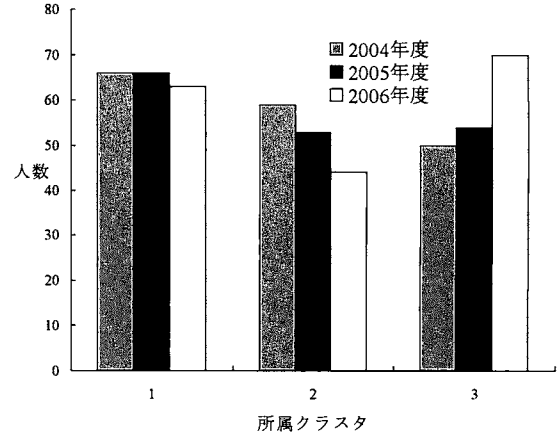


図３　所属クラスタの人数構成（年度別）

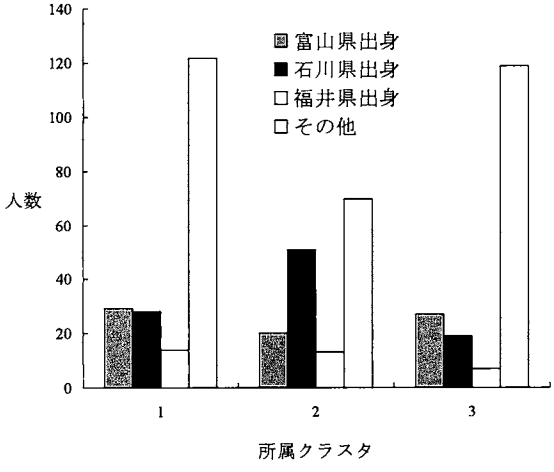


図４　所属クラスタの人数構成（学科別）

1988）により人数比の検定を行った結果，第３クラスタの男性が有意に多く，第３クラスタの女性が有意に少なかった。

次に，所属クラスタと所属学科との関連（図２），所属クラスタと年度の関連（図３），所属クラスタと出身都道府県の関連（図４）について検討すべく，各クラスタでの所属学科ごとの人数比，各クラスタでの年度ごとの人数比，及び各クラスタでの出身都道府県ごとの人数比について，ANOVAコーディングによる対数線形分析により，それぞれ人数比の検定を行った。観測度数及び推定値を表４に示す。表４に見られるように，第１クラスタでは人間学科に所属している人の人数が有意に多く，文学科に所属している人の人数が有意に少なかった。また，第２クラスタでは人間学科に所属している人の人数が有意に少なく，文学科に所属している人の人数が有意に多かった。年度については，第３クラスタで2006年度入学者の人数が有意に多かった。出身都道府県については，第２クラスタでは石川県出身者が有意に多く，その他の都道府県出身者が有意に少なかった。そして第３クラスタではその他の都道府県出身者が有意に多く，石川県出身者が有意に少なかった。

以上の点から，大学進学動機については３つの特徴が見いだされた。そして，第３クラスタの2006年度入学者の人数が有意に多かった以外，年度による人数比の有意差が見られなかった点から，これらの特徴は年度特有のものではなく，近年において見られる一般的な傾向であることが示唆された。

大学入学時点における，就職への意識のあり方について

所属クラスタと大学卒業後の進路志望との関係（図５）について検討すべく，各クラスタでの大学卒業後の進路志望の回答の人数比について，ANOVAコーディングによる対数線形分析により，人数比の検定を行った。なお，大学卒業後の進路志望の「家業を継ぐ」項目への回答数（１件，0.2%），

表４　各クラスタにおける所属人数（学科別，年代別，出身都道府県別）と推定値（（　）内）

学科・年代・出身／クラスタ	1（私生活志向）	2（目標志向）	3（受験ランク）
人間学科	77(0.221*)	38(-0.216*)	55(-0.005)
史学科	65(0.117)	40(-0.101)	51(-0.016)
文学科	53(-0.338*)	78(0.317*)	68(0.021)
2004年度	66(0.012)	59(0.130)	50(-0.142)
2005年度	66(0.022)	53(0.033)	54(-0.054)
2006年度	63(-0.034)	44(-0.162)	70(0.196*)
富山県出身	29(0.016)	20(-0.255)	27(0.239)
石川県出身	28(-0.202)	51(0.498*)	19(-0.296*)
福井県出身	14(0.124)	13(0.150)	7(-0.275)
その他	122(0.062)	70(-0.393*)	119(0.331*)

註：推定値が有意に正の値を取るものは，相対的に大きな度数を持つことを示し，有意に負の値を取るものは度数が小さいとみなしうる
*p<.05

表５　各クラスタにおける大学卒業後の進路志望と推定値（（　）内）

進路志望／クラスタ	1（私生活志向）	2（目標志向）	3（受験ランク）	計
大学院に進学	47(0.085)	30(-0.294*)	46(0.208)	123(0.275*)
民間企業に就職	37(0.203)	25(-0.119)	24(-0.085)	86(-0.082)
教員として就職	10(-0.613*)	39(0.818*)	13(-0.206)	62(-0.575*)
公務員に就職	33(0.185)	24(-0.063)	21(-0.122)	78(-0.179)
決まっていない	66(0.139)	38(-0.343*)	61(0.205)	165(0.561*)

註：推定値が有意に正の値を取るものは，相対的に大きな度数を持つことを示し，有意に負の値を取るものは度数が小さいとみなしうる
*p<.05

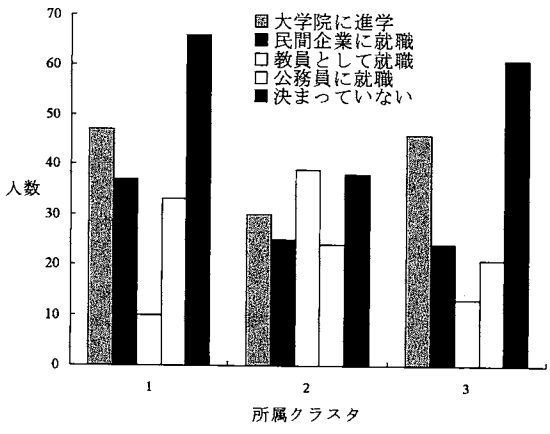


図５　大学卒業後の進路志望（所属クラスタ別）

「その他」項目への回答数（９件，1.7%）がわずかであった点から，これらの項目については分析の対象から除外した。また，「まだまったく考えていない」項目への回答もわずか（14件，2.7%）であった点から，この項目については「考えているが未定」項目と合計し，「決まっていない」項目とした上で分析を行った。

また，男女差については第３クラスタにおいてのみ，人数比の推定値に有意差が見られている（表３）。しかし推定値の値が小さい点，そして，他のクラスタについては有意差が見られなかった点から，男女まとめた上で，所属クラスタと大学卒業後の進路志望との関係について分析を行った。観測度数及び推定値を表５に示す。表５に見られるように，全体としては「大学院に進学」「決まっていない」の人数が有意に多く，「教員として就職」の人数が有意に少なかった。そしてクラスタごとについては，第１クラスタでは「教員として就職」の人数が有意に少なかった。また，第２クラスタ

では「教員として就職」の人数が有意に多く，「大学院に進学」「決まっていない」の人数が有意に低かった。

考 察

大学進学動機の特徴について

本研究では，金沢大学文学部学生の大学進学動機として，３つの特徴を持つ群が見いだされた。各クラスタの特徴を見ると以下の通りとなる。

第１クラスタ(私生活志向群)はサークル活動，キャンパスの環境などを始めとする，大学の環境的機能，大学生としての私生活を重視しているという特徴を持つ。これは，古市（1993），柳井ら（1989），淵上（1984）のような，従来の大学進学動機に関する研究において共通して見られる，モラトリアム的機能を求める側面が反映されたものであると考えられ，大学進学動機として非常に一般的な特徴であることが示唆された。また，入学年度による人数比に有意差が見られなかった点，所属人数の割合が全体の37.1%と最も多かった点も，この群の持つ特徴が大学進学動機として一般的な特徴であることを支持するものであるといえるだろう。

第２クラスタ（目標志向群）は主に進路実績，希望資格を重視しているという特徴を持つ。これは，希望資格については資格の種類にもよるが，多少なりとも就職を意識した傾向が反映されたものであると考えられ，古市（1993），柳井ら（1989）の研究で見られた，大学進学において就職を意識している傾向が本研究においても見られる結果となった。古市（1993）は，文学系の学部に所属している学生は他の学部に所属している学生よりも「資格・就職志向」が低いことを明らかにしているが，そのような中にも，進路実績，希望資格を重視している学生が少なからず存在していることが明らかとなった。また，この群においても，入学年度による人数比に有意差が見られなかった点から，この群の持つ特徴が年度特有の特徴ではなく，近年において継続して見られる特徴であることが考えられる。

第３クラスタ（受験ランク重視群）は，主に自分の学力を重視しているという特徴を持つ。これは，自分の学力を考慮した上で，とりあえず大学に入れれば良いという意識の表れであると考えられる。そのため，この群においては大学入学が最優先事項となっているために，その他のことが先延ばしとされていることが考えられ，第１クラスタとはやや異なる形で，モラトリアム的機能を求める側面が反映されているのではないかということが考えられる。また，第３クラスタの2006年度入学者の人数が有意に多かったことが明らかとなっているが，他の入学年度においては人数比に有意な差がみられなかった点から，この群の持つ特徴が近年において継続して見られる特徴であることが考えられる。しかし，2006年度入学者の人数の増加が，この群の持つ特徴が年々増加している傾向の表れであるのか，単なる偶然であるのかについてまでは不明である。

以上のように，本研究においては，モラトリアム的機能を求める側面を持つと考えられる２つの群と，多少なりとも就職を意識した傾向が反映されていると考えられる群が見いだされた。これらの特徴は年度特有のものではなく，近年において見られる一般的な特徴であることが考えられる。なお，これらの群の中には，大学進学動機の特徴として従来の研究において指摘されている，大学の本来的機能を求める側面が見られなかった。しかし，男女ともに８割以上の者が，金沢大学文学部の受験決定理由として「勉強したい学問分野のコースがあること」を重視している点から，これらの特徴は大学の本来的機能の喪失を示すものではなく，大学の本来的機能をある程度理解し，それを踏まえた上での更なる特徴として見いだされたものであると考えられる。この結果は，1990年代以降，現代大学生のキャンパスライフが急速に勉学第一の傾向を強めていることを指摘している溝上（2004）の主張を支持するものであった。

以上の点から，大学とは本来いかなる場であるのかということをある程度理解し，その上でモラ

トリアム的機能を求める傾向や，多少なりとも就職を意識した傾向などを重視するという学生の特徴が明らかとなった。本研究のような，金沢大学文学部学生という比較的等質性が高い集団においても，大学進学動機が一様なものではなく，異なる違いが見られた点は注目すべき点であろう。

また，金沢大学文学部の受験決定理由として「国立大学であること」を重視している者が男女ともに８割を越えていた点から，「国立大学」というネームバリューが全体的に重視されている点が明らかとなった。この傾向は地方国立大学ならではの傾向であると考えられ，国立大学の持つ世間的な評価などが多少なりとも影響した結果であることが考えられる。

大学入学時点における，就職への意識のあり方について

表５，図４の結果から，各クラスタの就職への意識のあり方について考察すると，以下のことが考えられる。

第１クラスタ（私生活志向群）は「決まっていない」と回答した者が群内で最も多かった。この群は大学の環境的機能，大学生としての私生活を重視しており，モラトリアム的機能を求める側面を持つと考えられる群である。そのため，大学入学時点においては，就職についての意識があまり発達していないことが考えられ，その結果が「決まっていない」という形で表れたものと考えられる。また，この群では「決まっていない」に次いで「大学院に進学」と回答した者が多かった。これについては，この群の持つ特徴から，目的意識を持った上での回答というよりも，就職についての決定の先延ばしといった側面が回答に反映された可能性が考えられるが，「大学院に進学」の回答の持つ意味についてまでは，本研究の結果では不明であった。同様に，「民間企業に就職」「公務員に就職」という回答についても，回答の持つ意味についてまでは本研究の結果では述べることができないため，これらの回答がどの程度，個人の主体的な選択がなされた上での回答であるのかについては，やや疑問が残る結果となった。

第２クラスタ（目標志向群）は主に進路実績，希望資格を重視しており，多少なりとも就職を意識した傾向が反映されていると考えられる群である。そのため，全体的傾向としては「教員として就職」と回答した者が有意に少なかったが，この群では「教員として就職」と回答した者が他の群と比較して相対的に有意に多かった。そして，全体的傾向としては「決まっていない」「大学院に進学」と回答した者が有意に多かったのに対し，この群では「決まっていない」「大学院に進学」と回答した者が他の群と比較して相対的に有意に少なかった。この「教員として就職」と回答した者が他の群よりも多かったのは，教員免許取得には然るべき講義の単位を取得しなければならないため，受験決定時点での目標志向が反映された結果なのではないかと考えられる。また，進路実績などを重視しているという点，「決まっていない」と回答した者が他の群よりも少なかった点から，この群は，他の群よりも就職についての意識は比較的高い群なのではないかということが考えられる。なお，「大学院に進学」と回答した者が他の群よりも少なかった点については，この群の持つ特徴から，就職についての決定の先延ばしという側面が反映された回答が他の群よりも少なく，目的意識を持った上での回答のみが純粋に反映された結果であることが可能性として考えられるが，詳細についてまでは不明である。

また，この群は他の群と比較して文学科に所属している人の人数が有意に多かった。これについては，文学科で取得することが出来る資格（教員免許）が関連していることが考えられる。すなわち，受験決定時点での目標志向が，文学科への入学という形で表れた結果であることが考えられ，ある程度就職を見すえた上での主体的な選択の表れである可能性が示唆された。

また，この群は他の群と比較して石川県出身者が有意に多く，北陸三県（富山・石川・福井）以外の出身者が有意に少なかった。これは目標志向群における地域性の表れを示すものであり，大学の教育的機能が地域と密接に関連しているものと

考えられる。これは地方国立大学ならではの特徴であるといえるだろう。

第３クラスタ（受験ランク重視群）は，就職への意識のあり方が第１クラスタと非常に似通った特徴を持つ群であった。この群は，第１クラスタ同様，モラトリアム的機能を求める側面を持つと考えられる群である。そのため，就職への意識のあり方が第１クラスタと非常に似通った特徴となったものと考えられる。よって，この群も第１クラスタ同様，大学入学時点においては，就職についての意識があまり発達していないことが考えられる。

また，この群は他の群と比較して石川県出身者が有意に少なく，北陸三県（富山・石川・福井）以外の出身者が有意に多かった。これは，自分の学力を考慮した上で，とりあえず大学に入れれば良いという，この群の持つ特徴が反映された結果であると考えられる。

以上の点から，金沢大学文学部進学者については，受験決定時点においては，大学進学の更にその先（就職）まで見据えた上で，ある程度主体的な選択をしていると考えられる人は全体の３割程度にすぎず，大学進学動機の特徴も踏まえた上で考えると，大低の者については，主に大学進学後に，就職についての主体的な選択がなされていくことが考えられる。このような理由としては，文学部での教授内容が，職業には直接的には結びつきにくいことが考えられるが，同時に，大学進学動機の特徴として大学のモラトリアム的機能，副次的機能を重視することが全面的に表れつつある点から，近年の進路選択の傾向として，大学進学者については就職についての進路選択そのものが基本的に，高校から大学への移行時点においては先延ばしにされていることが考えられる。

なお，大学卒業後の進路志望については，性別と大学卒業後の進路志望，所属学科と大学卒業後の進路志望の関連についてもそれぞれ有意差が見られた（性別×進路志望 $\chi^2=18.072$, $p<0.01$, 所属学科×進路志望 $\chi^2=64.940$, $p<0.001$）。このような属性と大学卒業後の進路志望の関連については，今後の検討課題である。

就職についての主体的な選択がなされる時期について

本研究で明らかとなった大学進学動機の特徴，そして大学入学時点における進路意識と実際の進路実績の相違から，就職についての主体的な選択がなされる時点については大学進学者の場合，主体的な選択を行っていく時期が全体的に，高校から大学へとシフトしてきていることが考えられ，大学はそのためのモラトリアム的役割を果たしていることが考えられる。また，本研究のデータと連動しているものではないが，金沢大学就職支援室（2007）の進路実績と大学進学時点における進路意識を比較してみると，平成19年度３月卒業者で実際に大学院へ進学した者は全体の16%であるのに対し，大学入学時点では全体の23%の学生が大学院への進学を志望している。そして，平成19年度３月卒業者で民間企業，公務員に就職した者は全体の58%であるのに対し，大学入学時点では民間企業，公務員への就職を志望している者は全体の31%であった。このような変化から考えると，大学在学中に就職への意識が変化し，そして就職についての主体的な選択がなされていくことが考えられる。

以上の点から，大学入学時点では就職への意識は比較的未成熟であるが，大学在学中に自分の将来について考え，就職についての主体的な選択を行っていくものと思われる。

まとめと今後の展望

以上の点から，金沢大学文学部学生の大学進学動機について異なる３つの特徴を持つ群が見られ，モラトリアム的機能を求める側面を持つと考えられる２つの群と，多少なりとも就職を意識した傾向が反映されていると考えられる群に分類された。これらの特徴は，大学の本来的機能をある程度理解した上での特徴であり，近年において継続して見られる特徴であった。そして，モラトリアム的機能を求める群と就職を意識した傾向が反映され

ている群では，就職についての意識のあり方に違いが見られた。

また，大学進学者については，就職についての主体的な選択を行っていく時期が全体的に高校から大学へシフトしてきていることが考えられ，大抵の者は大学在学中に，就職についての主体的な選択を行っていくものと思われる。そのため，大学側には，個人が職業選択に主体的に関わっていくための働きかけ，キャリア教育が求められるであろう。

なお，本研究では，大学入学時点での進路志望の回答の持つ意味についてまでは明らかにすることが出来なかった。この点については今後の課題となろう。また，個々の学生にとって有効な「学校から職業への移行」のあり方を支援するために，個人が何を基準として職業選択に主体的に関わっていくのかについても検討していく必要があるだろう。

引用文献

安達智子　(2004)．大学生のキャリア選択　日本労働研究雑誌，**533**，27-37.

古市裕一　(1993)．大学生の大学進学動機と価値意識　進路指導研究，**14**，1-7.

古市裕一　(1995)．青年の職業忌避的傾向とその関連要因についての検討　進路指導研究，**16**，16-22.

淵上克義　(1984)．進学志望の意思決定過程に関する研究　教育心理学研究，**32**，59-63.

金沢大学就職支援室　(2007)．卒業後の進路　金沢大学就職支援室　2007年9月20日〈http://www.ad.kanazawa-u.ac.jp/work/sinnro.htm〉　(2007年9月24日)

児美川孝一郎　(2006)．若者とアイデンティティ　法政大学出版局　pp. 125-134.

厚生労働省　(2006)．労働経済白書(平成18年版)　国立印刷局　pp. 18-19.

松田紀之　(1988)．質的情報の多変量解析　朝倉書店

溝上慎一　(2004)．現代大学生論　日本放送出版協会

文部省　(1996)．平成8年度　学校基本調査報告書(初等中等教育機関専修学校・各種学校編)　大蔵省印刷局　pp. 596-597.

文部科学省　(2001)．平成13年度　学校基本調査報告書(初等中等教育機関専修学校・各種学校編)　財務省印刷局　pp. 706-707.

文部科学省　(2006a)．平成18年度　学校基本調査報告書(初等中等教育機関専修学校・各種学校編)　国立印刷局　pp. 726-727.

文部科学省　(2006b)．平成18年度　学校基本調査報告書(高等教育機関編)　国立印刷局　pp. 16-17.

日本労働研究機構　(2000)．進路決定をめぐる高校生の意識と行動―高卒「フリーター」増加の実態と背景―　日本労働研究機構　pp. 3-11.

豊田義博・菊池将　(2002)．新卒神話の崩壊　大久保幸夫(編著)　新卒無業。　東洋経済新報社　pp. 1-56.

柳井晴夫・清水留三郎・前川眞一・鈴木規夫　(1989)．進路指導と大学情報に関する調査結果の分析　大学入試センター紀要，**18**，1-71.

柳井修　(2001)．キャリア発達論　ナカニシヤ出版　pp. 97-122.

付　記

・本論文は，金沢大学文学部入学者アンケート調査専門委員会(岡田，轟委員)によって実施されている過去3年間の新入生調査データに基づいて得られた知見に基づくものである。

・本研究の統計処理にあたっては以下の統計パッケージソフトウェアを用いた。
SPSS 11.5J for Windows (SPSS社)

[注1]本来，大学進学動機とは何を目的として大学に進学するのかを問うものであるが，本研究では，教示内容として金沢大学文学部の受験決定理由を求めている。しかし，質問項目の内容は一般的な大学進学動機と重なった概念がより具体化されたものであり，本研究は大学進学動機研究の一端を示すものである。